

説教 『神の息／被造物の支配』 山本 護牧師  
聖書 創世記1:24～28／ローマ書8:14～16

「神は御自分にかたどって人を創造された。神にかたどって創造された。男と女に創造された(創世1:27)」。では、神は人に似ているのか。何とも微妙、キリストのことを考えると…。人類創造と並行して動物たちも造られているが(1:24)、それらすべてを人間に「支配せよ(1:26,28)」と命じた。「支配」とは何やら人間が偉そうだが、神の片鱗である自然それ自体を崇める原始宗教とはここが違う。

「御手によって造られたものをすべて治めるように、その足もとに置かれました(詩編8:7)」。つまり支配とは「足元に置く」というイメージか。足元を注視して想像を膨らませよう。私たちは地の上で生きている。またすべての被造物も「地」から造られた(1:24)。生命を与える神の業は次のように表現される。「主なる神は、土(アダム)の塵で人(アダム)を形づくり、その鼻に命の息を吹き入れられた。人はこうして生きる者となった(2:7)」。つまり人間は、ひいては全被造物は「土=地」から造られた。

土である私たちは、土である被造物なしには生きられない。土の命を食べ、呼吸をつないでいる。命を屠る者はそのことを生々しく知っているだろう。「支配せよ」とは、命を好き勝手にできることでは絶対でない。共に土として生きる存在の悲しみを、痛みを、命に対する責任を、自らに負うことではないのか。人は「神にかたどって創造された(1:27)」。ゆえに私たちは創造主なる神のまなざしを思い描きうる。そしてまた「土」の結びつきとして、この身をもって被造物の生死をも感じうる。自分に絶対不可欠なものとして、慈しみ、感謝し、尊び、共に呼吸する「土」を「支配」して頂戴する。

ところが人間は、分不相応な「神のかたどり」によって罪を抱え込んだ。貪欲や驕慢の徒となり、想像力の乏しさで被造物の命が見えなくなっている。すなわち土への畏敬、被造物の痛み、「吹き入れられる息(霊2:7)」への自覚が鈍化している。フクシマの深刻さは、「土」の荒廃ではないのか。原発や核兵器、乱開発はなかなか止まらない。覇権や商売優先の、国家や企業単位のえげつない行為にどう立ちむかうか。えげつないまま「神にかたどられた良心」はあるが、「支配」という使命に対して積極的に鈍化している。今こそ「神にかたどって創造された(1:27)」人間の責任を思い起こす時。すべての被造物が呼吸できる「支配(1:26)」のために、私たちの貪欲や傲慢、つまり罪とむかい合いたい。

被造物が誠実に「支配」されえないのは、人間が金や権力の奴隷になって被造物を「モノ」と見ているから。「あなたがたは、人を奴隷として再び恐れに陥れる霊ではなく、神の子とする霊を受けた。この霊によってわたしたちは、〔アッバ、父よ〕と呼ぶ(マ8:15)」。この霊(息)は「土」である私たちの「鼻」に吹き入れられた(創世2:7)。だから世の奴隷としてではなく、「神にかたどられた(1:27)」、「神の子(マ8:15)」として生きる。そして「アッバ」と親しく呼びかけうる創造主に仕えたい。

「アッバ、父よ」と呼ばせる霊が、「わたしたちの霊と一緒に証ししてくださる(8:16)」。私たちの「霊」と「神の霊(8:14)」とは同質、「神の息・霊(創世2:7)」そのものだ。今日も山麓には風(霊・息)が吹き、地(土)から生じた被造物を生かしている。この奇跡を知るなら「支配」は光栄なる仕事。



《おまけのひとこと》

むかい風に立つ時 歩みはきつくなって 自らを省みる いや 意地を張って かえって決意を固めるか 追い風の聖霊ではどうだろう 背中を押される風任せ どこへ漂着してもかまわない覚悟